

◎新型コロナウイルス禍の中での留学

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

新型コロナウイルス感染拡大の影響で今年の留学生の学習環境は様変わりしました。

海外から日本の日本語学校や大学に留学を予定していた皆さんの中には母国からの渡航制限や日本政府の水際対策で来日できない人が多数いることでしょう。また、入国したものの、学校の授業が始まらなかったり、始まってもオンライン授業が多いにも関わらず Wi-Fi 環境を思うように構築できなかったりした方もあるでしょう。授業を受けられても、学校や住んでいる街自体の機能が停まり、自らの生活基盤の構築に苦労されたケースもあると聞いています。

今年の春から秋にかけて日本の教育を受けることを断念せざるを得なかった方が多数おられます。こうしたことは、日本政府にとっても、各学校にとっても、本意ではありません。感染拡大が始まってから半年以上が経ち、ウイルスへの対処方法が次第にわかってきたこともあり、事態改善のため、政府は10月から全世界を対象に留学生の入国受け入れ対象を私費留学生も含めて全面解禁に踏み切りました。

ビジネス目的での長期滞在者に加え、日本に3カ月以上滞在する医療、スポーツ関係者もPCR検査の実施や入国後14日間の待機を条件として入国が認められ始めています。その14日間も次第に緩和されています。こうした形で徐々に世界との交流が再開されています。これからは、ポストコロナ、ウィズコロナの中で、いかに国際交流を続けていくかの模索が続いていきます。

新型コロナは全世界的なパンデミックですので、こうした状況は、日本に留学される方だけの問題ではなく、日本人の一般の学生たちも同じ環境に置かれています。日本から海外への留学生も同じです。

日本の大学では今年度の春学期(4月～9月)はほとんどがオンライン授業になりました。秋学期(10月～来年3月)も、多くがオンライン授業を取り入れることにしています。一部実習や演習などでは並行して対面授業を取り入れた大学がありますが、そうした講義の数はごくわずかです。

こうした中で9月中旬、ある大学の体育会柔道部にマネージャーとして入部した1年生の日本人女子学生とZoomで話す機会がありました。

「学園生活はどうだい」と聞いたところ、「まだ教室に行っていないので、同級生には会ったことがありません。秋学期も同じ状況が続きます」と言います。

「では、どうやって柔道部に入ったの」と聞くと、「部のサイトを見て興味がわき、『部活動を見に行きたい』と書き込んだところ、先輩部員から『ぜひ、見に来てください』と親切に言われたので見学に来て、入部を即決しました」と答え

ました。「高校時代に柔道をやっていたの?」「いえ、地方の女子高で柔道部はありませんでした。実は、格技への興味も持っていませんでした。大学に入ってもオンラインばかりで、授業のためにキャンパスに行く機会がないので、暇にあかせていろいろな学内サイトを見たのが柔道部に顔を突っ込んだきっかけです。東京に来て柔道部以外でリアルに人に会うことはありません。部に入れて本当によかった」。私も彼女とは Zoom の画面を通じてしか会っていませんが、この話を聞いてびっくりしました。多くの新入生が孤独を味わっているのです。留学生ばかりでなく、日本人の新入生も学内で人と関わる機会がないようです。

自分の国の大学に入ってもこういう状況です。ましてや、留学生は大変でしょう。昨年まで思い描いていた留学先での学生生活の理想像を思い切って振り払い、今の状況でいかにして日本を楽しみ、日本文化を吸収するかを考えてもらいたいものです。そのうえで、オンラインや、オンラインと対面を併用したハイブリッドで日本語の勉強をする。それが、2020年という年に海外留学を決意した留学生諸君にしか得られない貴重な人生経験となることでしょう。

建学から160年の歴史を持つ日本の私学である慶應義塾が発行している月刊誌『三田評論』の8・9月合併号では、「コロナ危機と大学」という特集が組まれました。その中に、「コロナ危機が教育・研究・国際交流にもたらしているもの」という、6月にオンラインで行われた座談会が収録されています。学校法人経営者である常任理事や大学の国際交流部門の教授や担当者によるもので、そこから留学生に関する部分を引用し、日本の学校の国際交流の実態をご紹介します。

この大学には多様な留学生がいます。4年間在学して学士号を取得する留学生のほか、例年、1月末から2月にかけて短期プログラムで留学生を数週間受け入れる一方、海外の大学に学生を派遣する短期派遣プログラムも実施しています。その海外に出た学生たちがコロナ禍に巻き込まれ、大変な思いをしました。

フランスでは、突然国家レベルでのロックダウンが行われたため、キャンパスが全面閉鎖され、プログラムが打ち切られました。日本からの留学生たちは「まだほとんど授業を受けていないし、パリ観光もしていないので残りたい」という意向でしたが、パリ市民が誰も街に出ていない状況を見て、急遽帰国したそうです。中国や韓国、豪州、ニュージーランドなどに行っていた学生もほぼ同様です。米国は留学生の受け入れも派遣も停止しました。世界各国の各大学はオンライン授業が始まりましたが、日本はオンライン化が遅れたようです。

夏休みになって、欧州の大学では、ハイブリッド型の授業が始まりました。この大学でも、試行錯誤でしたが、意外なことに、「オンラインで留学」というものを受け入れる留学生がいたようです。母国にしながら、留学先の学校のオンライン授業を受けるのです。国際交流担当者の間では「バーチャル・エクステ

ンジ」という言葉がよく出てくるそうです。

コロナ禍が広がってからは、役所や会社の仕事も在宅勤務、国家の外交もオンライン国際会議やテレビ電話による首脳・閣僚級会談が主流になってきています。そうした社会情勢の中で、学問を修めるだけなら、オンライン留学もありかとは思いますが、先ほどの柔道部の女子マネの話でも分かるように、大学というところは、学問をするだけでなく、キャンパスを中心とした日常生活や部活動を通じて、人間(じんかん)教育を行うところです。日本語学校も、「日本文化を学ぶ」という角度から見れば、まさに同じだと思います。

この「人間(じんかん)」という言葉は、英語の「society」を日本語で「社会」と訳した19世紀の日本の思想家で慶應義塾の創立者である福澤諭吉が「人間」と書いて「じんかん」と読ませました。「社会の発展、人の発達には、人と人との交わりが大切であり、それを『人間(じんかん)交流』という」そうです。東京・銀座には福澤が明治13(1880)年に作った日本最古の社交クラブである交詢社があります。「交詢」とは、「知識を交換し、世務を諮詢する」から取ったもので、「めざましく変化する社会に対応するためには各人が互いの知識を交換しあって流動する社会に対処する機会を提供することが必要だ」との趣旨が込められています。

日本語学校や大学においても、日本語や学問の勉強に加え、教員や学生同士など、様々な人との交流が必要です。言うまでもなく、留学というのは、自国内では得られない、世界の人々との「交詢」を得られる絶好の機会でしょう。

日本では幸いにして、欧米諸国に比べて新型コロナウイルス感染症による死者や重症者の数が抑えられています。駅やスーパーマーケットなどでも、皆が積極的にソーシャルディスタンスをとり、マスク着用や手洗いを励行しています。大相撲やプロ野球、サッカーの観戦でも、これらの取り組みに加え歓声を上げず、拍手で力士、選手を応援する形が定着しています。こうした習慣がいきわたったこともあり、爆発的な感染拡大が起きていません。

そうした社会基盤をさらに強固にして、留学生には工夫を重ね、幅広く「人間交流」をしてもらいたいものです。その工夫とそこから生み出されるものこそが、留学生、そして彼らを受け入れる学校が、こういう特殊な年に手に入れることができる大きな成果ではないでしょうか。